仕事三原則

上　月　　明

一、弱音を吐くな！
二、人を頼るな！
三、仕事に身体を張れ！

今の若い人が聞けば、吹き出してしまうか、笑ってしまいそうな言葉である。『仕事三原則』、今でも当時の出来事を思い出すことがある。この経験を小説風に書いてみた。その方が臨場感が味わえると思うからである。

私が二十代後半のころ、在職していた課に会計検査院が入り、担当していた『転作団地化事業』が検査の対象になった。

人々がまだ正月気分の余韻を残している一月の下旬だった。なにせ会計検査という初体験の重圧に翻弄された。

重圧の原因は職場内にもあった。課長が私事都合で昨年末に退職し課長職は部長が兼務となっていた。また係長も体調不良で療養休暇を取っていたのである。

私の心の中は、戸外で吹き荒れている寒風が、一度に襲ってきたようなショックで、恐怖心と不安で重症患者のように沈みきってしまった。

転作団地化事業とは、全国で米の豊作が続き余剰米の保管に経費がかかることから、米以外の作物を奨励し、一定の地域を決めて農家が集団で転作を団地化すれば、補助金が支払われる国の補助事業である。

条件として、すべての転作田が繋がっていなければならず、米が作れない荒れ田や水が溜められない傾斜した田は含めることはできない。団地化は通常の転作より補助金が多くもらえるだけあ

って、基準も厳しくなっていた。

検査が入るとわかってから、毎日深夜まで書類整理に追われた。不安な心理状態が同僚たちにも伝わるらしく、職場の雰囲気が暗く仕事の効率は目に見えて悪かった。書類整理が進むにつれて、国庫補助基準に適合していない部分が出てきた。書類で誤魔化せても、現地を見られれば万事休すだ。そんなことを考えると、腹部の辺りに鈍痛が忍び寄ってくる。

今まで国庫補助を受けて事業を実施しているが、農業関係では一度も会計検査が入っていない。そんな油断が補助事業の厳しさを忘れさせ、事務処理を粗雑にさせたのかもしれない。

会計検査で指摘を受け、それを処理できなければ補助金返還と、職員の行政処分となる。そんなことが頭に浮かび不安が膨れ、腹の底からプレッシャーを感じた。

会計検査への職員を指揮する課長、係長がいない職場は混乱していた。同僚たちだって、自分が担当している仕事が外れれば、今回の会計検査だって他人事でしかない。

残業で家に帰って寝床に入るのが午前二時、目が覚めるのが決まって午前四時三十分だった。出勤には七時に起きれば間に合うのだが……、もっと眠らなければ身体に悪いと思いながらも、神経が高ぶって眠れなかった。会計検査のことが一瞬でも頭から離れない。寝不足のはずだが眠気は感じない。もちろん食欲もなく、吐き気をもよおすこともある。一日二十本吸っていたタバコも味が苦く感じられてやめた。

出勤時間が近づくにしたがって、身体にだるさを覚える。口の中が乾き、朝飯が喉を通らない。精神が重く沈んでいく。身体が職場を拒否しているのがわかる。学生の登校拒否ではないが、通勤拒否症かもしれない。これが会計検査の重圧なのだろう。

悪いことは重なるもので、生まれて五ヶ月の長女が熱を出し、妻も看病疲れから微熱が出てきた。三歳の長男にまだ手がかかるというのに、私には子どもや家庭のことに手を貸してやるだけの

余裕がない。仕事のことで精神的にも肉体的にも限界である。それでも何とかしなければならない。放っておけば家庭崩壊になってしまう。

「すまないが、子どもを連れて実家に帰ってくれないか」

妻にそう言って、電話で義父母に事情を話すと、夜遅くなっていたが、その日のうちに迎えに来て連れて帰ってしまった。子どもたちが居なくなると、家の中にぽっかり穴が開いたように、寂しい気持ちが吹き出してきた。

自分の立場を不運と諦め、ここは開き直るしかない。やられるか、やるしかのどちらかなのだ。自分自身に『仕事三原則』という目標を立てた。これしか自分を奮い立たせるものは見当たらない。

検査当日、福祉会館が検査会場にあてられていた。午前十時に県の公用車である黒塗りのクラウンが到着し、会計検査員を出迎えた。東京の会計検査院から二人、もちろん県の職員も同行していた。

ひとりは四十歳くらいの男で眼鏡をかけ、目が鋭い顔をしていた。もうひとりは、二十代半ばの若い男である。両名とも真新しい作業服に黒光りしたゴム長靴をはいていた。これは県から貸し与えられたものであることは推測がついた。そして、国の検査機関である権限の偉大さを物語るように、同行している県職員がぺこぺこと頭を下げながら検査員の対応に追われていた。

会議室で出迎えの挨拶をしている副市長の後ろ姿を、部長の横に立って見ていた。壁に掛けてある時計の音が、鼓動と重なるように、はっきり聞き取ることができた。

「転作団地化事業を見せていただきます」

眼鏡の検査員が当然な顔をして、開口一番そう言った。重圧に耐えている心境を隠し、表面上は平静を保ち、書類を検査員の前に広げた。それは悪戦苦闘の始まりだった。

二つ並べた会議用テーブルの向こう側に検査員二人が、こちら

側には部長と私が座った。県職員は横側に、同僚たちは他の事業の質問に備えて、私の後方に待機した。

検査員から矢継ぎ早に質問が飛びだしてきた。立って書類の関係箇所を指で押さえ、詰まりながらも対応する私の顔に、検査員の槍のような視線が突き刺さる。逃げるわけにはいかない。自分の後ろにはカバーしてくれる者は誰もいない。隣では部長も渋い顔で受け答えしていた。

検査員からの質問には、頭の中で消化させてから、ワンテンポ遅らせて応えた。緊迫した中での失言は命取りになりかねない。つじつまが合わなければ、突っ込まれるのはわかりきっている。喉の渇きを覚えた。

十一時、女子職員がジュースを検査員の前に置くと、県職員が「少し休憩にしませんか」と助け船を出してくれる。

検査員がうなずくと、張り詰めていたその場の雰囲気が和らいだ。検査員がトイレから出てくるのを見計らって洗面所に行く。手洗いの鏡に映し出された自分の顔に、『仕事三原則』の言葉を投げかけ、気合いを入れる。

部屋の掛時計が十二時を指した。私は横目で見ながら溜息を漏らした。県職員は検査員に耳打ちし、検査の再開は一時からとなった。

「隣の部屋に昼食の用意をしております」

部長が、検査員に声をかける。

「食事は結構です」

検査員はそう応え、近くにいた県職員に、食事のできる場所へ案内をするように言った。

検査員と県職員が食事をするために会議室から退室すると、漂っていた緊張感が緩んだ。昼からの検査のことを考えると、出前の弁当を前にしても食欲が湧かない。午後は現地確認が控えている。不安を払拭することはできない。検査員は転作田の現地確認書類から転作の団地化がされている場所を、頭の中で選択してい

るはずである。

午後一時きっかりに、書類の検査が始まる。会計出納簿を見た後、補助金が農協経由で農家の口座に振り込まれている資料と、転作団地化実施地区の地図を求められた。

「団地化されている地域の地図が新しいですが、この地図は確認で現地に持って行かれたものですか」

地図を手にした眼鏡の検査員の声が会議室に響いた。

「それは、今回の検査のために作り直したものです」

私は丁寧に応えた。

「現地を確認した当時の地図を見せてください」

「それが転作確認した日が雨で、色鉛筆でチェックしたところが濡れて滲んでしまったものですから……」

「実際、現地に持って行った手垢にまみれた地図が見たいのです。会計検査のためにわざわざ作った地図は、本当に現地を確認したのか疑いたくなります」

眼鏡の検査員は持っていた新しい地図を、書類が広げられている上に、無造作に放り投げた。ぴりぴりした空気が辺りに漂った。

「古い地図はあるんだろう？」

部長が横から口を挟んできた。

「それが……汚れていたので廃棄処分にしてしまいました……」

検査員に向かって軽く頭を下げた。眼鏡の検査員は口元を固く閉じ、私を睨み付けて、二、三回うなずいたが、顔が強張っているのが読み取れた。印象を悪くしたのは明らかだ。

部屋の時計が三時になろうとしたときだった。

「今から団地化された現地を見せていただけますか」

眼鏡の検査員が言い出した。現地確認は予期していたが、やはりショックだった。私は緊張の糸が切れたように、椅子に座り込んでしまった。現地を見るといっても、まともに転作の団地化ができているところはひとつもない。

この時期になると、田んぼに稲が植わっていることはないが、

切り株で稲が植えられていたか、転作がされていたか現地を見れば わかる。書類では何とか誤魔化すことはできたが、現地ではそうはいかない。

眼鏡の検査員は、会議用テーブルの上に広げられた転作団地化実施地区の地図を見つめてから、私の顔を見上げるようにして言った。

「この二カ所を見せてもらいましょうか」

検査員の顔が執念深い蛇に見えた。やはり書類検査もしつこい。現地検査を受けることになったところは、団地化の中に荒れ地を含んでおり、もう一方は田んぼが傾いており稲を作れる状態ではなかった。今さら悔やんでも、既成の事実を変えることはできない。

私の精神は疲労の頂点に達していた。周囲にいる同僚の顔を見た。担当している事業が会計検査から外れ、安堵している者には、私の精神状態など微塵もわかるはずはない。同僚の顔の表情からは対岸の火事としか感じ取っていないようである。

「私だけが……こんな目に遭わなければならないのだ！」

だれにも聞こえない声でつぶやくと、胃のあたりから重く鈍い痛みがまた押し寄せてきた。同僚たちは高みの見物顔で、互いに声をかけ合い現地へ向かうために会議室を出ていった。

私は気持ちが落ち込むのを振り切り、下向き加減になりがちな上半身を反り背筋を意識して伸ばし、みんなの後を追った。

一月は日が短い。クラウンを先導し現地に着くと、夕日が西の空を朱色に染めていた。検査員は両手に転作団地化実施地区の地図を広げ、周囲を見渡し現在地を把握してから、転作状況を見て地図に示されている転作田とを照合していた。私は検査員の側に立ち質問があったときに返答できる態勢を取っていた。

突然、眼鏡の検査員が走り出した。田んぼの中を横切り農道を指さした。

「この農道は何ですか、この地図では農道は存在しないはずです

が」

厳しい目つきで検査員は、私に視線を向けて言った。農道の側面を枯れた茶色の芝が覆っていた。地図には転作田となっているところに、農道が通っていたのである。

「この農道は、転作を終えた後に造られたものであると思われます……」

私は検査員に走り寄り応えようとしたが、次の言葉に詰まった。農道がいつ造られたか知らなかった。

「それでは、農道が秋以降に造られたという資料と、農地転用の手続きがされている資料を見せてください」

検査員の顔には、鉱山で金脈を掘り当てた喜びが漂っていた。昨年の秋以前に農道が造られていたのなら、転作を行っていないことであり、当然転作団地化形成の条件が合致しないことになり、補助金の不正受給になる。

腹の中で胃がねじれて絞られる痛みを覚え、左手で腹を押さえるようにして下を向くと、靴とズボンに泥が付着していた。今の局面を考えると、靴やズボンの汚れなど気にする心境になかった。

「そんなこと突然言われても、今は手元に持っていません」

私は困惑し、弱々しい声を出していた。

「明日は、丹波篠山市に居ます。五時頃に検査は終わると思いますので、その頃に来てください」

検査員から強い口調が返ってきた。私はうなずくように聞いていた。

先ほど西の空を赤く染めていた夕日も沈み、辺りに夕闇が迫っていた。二人の検査員と県から同行していた職員が、顔を寄せ話し合っていたが、県職員が私に向かって話しかけてきた。

「検査員の方から、暗くなってきたので、本日の検査はこれで打ち切るとのことです」

検査員は県が用意した黒塗りのクラウンに乗り込むと、走り去ってしまった。私は検査員の車を見送りながら、長い一日がやっ

と終わろうとしていることに安堵感を覚えた。しかし、明日のことを考えると気が重かった。市役所に帰る道中だれとも喋る気になれなかった。

重い足取りで帰ってきた私は、思い詰めたように部長の前に進んだ。

「部長、もう限界です。これ以上会計検査員の対応はできません」

ソファに座って休んでいた部長に向かって低い声で言った。

「君は……何を言っているんだ！」

部長はこれ以上開かないくらい、大きく目を剥いた。その白目の血管が赤くなりかけていた。

「もう……」

部長に顔を睨み付けられると、次の言葉が出せない。

「それに君は、農道が出来ていたことも知らなかったのか、普段から何をしていたんだ！」

「それは……」

部長は弁解しようとする私を制止して、

「言い訳は聞きたくない。まだ会計検査は終わっていないんだ。弱音を吐く前に、明日の対策を考えろ！」

部長もプレッシャーを感じているのか、顔を紅潮させ怒鳴るように言った。

私の目に涙が滲んでいた。速くなった鼓動を感じながら、自分の席に戻るしかなかった。同僚たちは部長の顔色を窺うようにして、話の中へ入って来ようとはしない。前方から会計検査というプレッシャーを、背後から部長というプレッシャーを受けなければならなかった。自分の置かれている不運を悔やみ、そして、胃の鈍痛を感じつつ仕事を進めていくしかない。

私は席を立ち、トイレに向かった。どこの課も残業をしていないのか庁内は電気が消されて、廊下の誘導灯だけが点っていた。トイレも電灯は消され真っ暗だった。洗面の電灯を付けると、青白い意気消沈した顔が鏡に映しだされていた。

しばらく鏡の顔を見つめていた。そしてゆっくり目を大きく剥き、口を大きく開き、鬼の顔をした。それからゆっくりつぶやいた。「弱音を吐くな。人を頼るな。仕事に身体を張れ」それを何回も繰り返した。少し気持ちが落ち着いた。

「ここは前に進むしかないのだ。逃げるわけにはいかない。逃げれば職場を捨てることになる。そうなれば明日からどうして生活していくのだ。子どもたちだって将来がある。子どものためにも頑張らなくては……」

鏡に映った顔に言葉を投げかけ、気持ちを切り替えた。

あくる日、会計検査員に付き添っている県職員から連絡が入り、丹波篠山市でも時間がかり、兵庫県庁の隣にある県民会館で待機するようにとのことだった。

夕方、部長と農業委員会職員を含め総勢八名が公用車二台に分乗して、神戸市内にある県民会館に向かった。検査員から指摘のあった農道について、農地転用が関係していることから農業委員会の職員にも同行してもらった。

神戸市街地へ続いている県道を走った。白川峠にさしかかるとフロントガラスを通して、市街地と神戸港が一望できた。よく見る風景だが、今日はその美しさが私の心を余計に侘しくさせた。

県民会館に着いたのは、五時少し前だった。検査員はまだ帰っていなかった。ロビーで一時間ほど待っていると、玄関辺りが騒がしくなり、検査員が到着したことを知らせた。緊張感がじわじわと沸き立ってくる。

しばらくして呼び出しがあり、部屋に入ると正面の壁を背にして、二人の検査員が机を前にして座っている。ほとんど汚れていない作業服姿は昨日と同じだった。私は軽く会釈をして椅子に腰をかけた。眼鏡の検査員は指摘した内容を確かめるためか、持っていたノートに視線を落とした。

「それでは説明していただきましょうか」

検査員は顔を上げて、机の上に広げてある地図に視線を向けた。

私たちは打ち合わせたとおり、農地転用の書類から説明していった。リハーサルを行い準備をしていたせいか、前回のように詰まらずに喋ることができた。農業委員会職員と私の説明で、検査員も納得したようだった。

「わかりました。もう引き取っていただいて結構です」

あっけない幕切れだった。しかし、会計検査員の言葉をかみ締めながら感動を覚えた。やっと会計検査というプレッシャーから解放され、同時に胃の鈍痛からも逃れることができた。

県民会館からの帰り道、私と同じ公用車に乗っていた部長は、顔に笑みを浮かべ声をかけてきた。

「今日はよくやった。もう大丈夫や」

明日は県庁で会計検査結果の講評を聞きに行かなければならなかったが、今日の検査員の口ぶりからして、まず問題はないように思われた。

会計検査が無事に終わったことから、私は実家に預けている妻と子どものことが気になっていた。部長に事情を話し、明日休ませてほしいと申し出た。

「そら心配やろ。二、三日休んで家庭孝行してきたらよい。講評の方はわしが聞いておくから」

部長は機嫌よく応えた。腕時計は九時を指していた。公用車の中で私は大きな山を征服したような充実感に浸ることができた。

だれもいない家に帰って、ひとり寝床につくと会計検査で四苦八苦した出来事が思い出された。『仕事三原則』を、つぶやいてみたが違和感を覚える。プレッシャーを感じていたときの、つぶやきと違うのである。

『喉元過ぎれば熱さを忘れる』の、ことわざが頭に浮かんだ。